

このごろの幼児の病氣

2

なおざりにされやすい身体の異常

上 村 菊 朗



まえがき

子どものことには気をつかいすぎるほどの母親が、思わぬ病氣を見落としていることが多い。

その一つは、病氣自体が気づかれにくいためのもので、他の一つは、気づいていても病氣として問題にしない場合である。この際、集団の中で、身体の異常や病氣をできるだけ早く発見し、保育者の立場から真に適切な助言を与えることが大切である。今月は、このような角度から幼児期の身体の異常、病氣をとりあげてみたいと思う。

気づかれにくい異常と病氣

1 感覚器の異常

私たちの生活に最も身近な眼や耳など感覚器の異常は案外、見

過ごされていることが多い。家庭内に、比較する同年齢の子どものいないこと、親子の間では多少の異常があっても意志の通じやすいことが主な理由であろう。この意味で、保育園、幼稚園はこのような障害を発見しやすい場所といえる。

なかでも、幼児の難聴は見落とされやすいので、このような子どもの特徴を頭において観察する必要がある。物音に驚かない、鈴やベルなど、家庭で聞きなれない音に対しても反応がない、といったことがまず参考になる。単語の語尾がはっきりしない、落ち着きがなく、お話を聞いているときも、口もとばかりみつめたり、いらいらしたようすを示すことがある。それとなく、うしろから小声で話しかけたり、指をすり合わせて音を聞かせて反応をみてるのもよい。年齢的には、聴力検査もできるので疑わしいときは家庭と連絡し、精密検査を受けるように指示する。

また、この年齢では、難聴の原因として、アデノイド肥大から

の鼓膜の変化がよくみられるので、いつも口をあけている、^鼻をかく、うつぶせでないと寝られないといった症状にも注意してみる(ことである)。

つぎに多いのが、眼の異常である。幼児期には、弱視(視力〇・六以下)、特に近視はまだ少ないが、絵本やテレビなどに、必ず目を近づけてみるときは、弱視を疑い、幼児用の視力検査表で確かめてみる。

斜視も、園児の中に必ず一〜三人はみつかる異常である。両親は案外気づかずに、まわりの人に指摘されることが多い。この意味でも、集団の中で、目つきにぎこちなさが感じられるときには家庭に連絡することが大切である。軽い場合は、疲れたときだけに斜視のあらわれることもある。

原因は別として、斜視があると、目標を注視しない側の目(患眼)は、そのためにさらに視力を失うおそれがあるので、早期の対策が必要である。最近では、手術療法をふくめて斜視の治療は幼児初期から始めるので、発見次第、専門的診察を受けるよう勧めなくてはならない。

また、色神の異常が、幼児の絵に使われた色から偶然発見されることもある。

このように、幼児期の感覚器異常は、集団の中で初めて発見されることが多いので、入園を機会に、あるいは、一〜三ヵ月に一

度でも、特に異常を探し出す気持ちで幼児に接したいものである。

2 外科的な異常

鼠蹊ヘルニア、停留こう丸、扁平足といった外科的な異常が幼児期に入っても見落とされていることが多い。

鼠蹊ヘルニア、停留こう丸は、幼児を裸にしないと発見できないので、家庭に連絡してその有無を確かめてもらっておく必要がある。鼠蹊ヘルニアは、鼠蹊部(ふともものつけね)に^{ぼし}拇指頭大、あるいはそれよりも大きいふくらみにふれることではつきりする。また、停留こう丸は、陰嚢内に左右のこう丸があることを確かめないと見落とされることがある。

鼠蹊ヘルニアは、ときによって出沒するので、身体検査や、計測のときには見過ごされがちである。

いずれも、幼児期まで症状が残っていれば、なるべく早く適切な治療を受ける必要があるので専門的診察を勧める。特に、停留こう丸をそのままにしておくと、こう丸の発育が妨げられるだけでなく、下降していないこう丸の性質が変化するおそれがある。

この場合、泌尿器科専門医の診察をうけ、ホルモン療法、必要があれば手術治療を受ける必要がある。

扁平足、外反足といった運動器の病気もときとして見落とされ

ている。乳児期にはありふれた症状であるが、三、四歳を過ぎて残るときは異常と考えなくてはならない。特に、外反足に扁平足の合併する場合が多いので、身体計測に際し、足をそろえてまっすぐ立つように指示して観察してみる。足さきがそろわず、土ふまずに指さきが入らないくらいに床に接していれば異常と考える。このような子どもは、長歩きができず、すぐ、親にだっこ、おんぶと訴えていることが多い。いづれにしても、このような異常は整形外科の専門医からの指示を受け、必要があれば整形靴などを着用させる。

3 貧血

疲れやすい、活気がない、食が細いといった幼児に案外多いのが貧血である。この年齢は、成長速度が早いいため、栄養のバランスがくずれやすく、鉄分の不足からくる食餌性貧血が最も多くみられる。特に、野菜や肉類を嫌うといった偏食児によくみられるので注意しなければならない。

幼児の顔色は、皮膚の色や、皮膚に分布している毛細血管の状態で一様でないので、顔色が悪いだけで貧血であるときめつけることはできない。したがって、顔色が悪いときは、病院で、血液検査を受け、見かけだけの貧血か（仮性貧血）、本当に貧血があるかをきめてもらう必要がある。検査の結果、たしかに、赤血球

数、特に、その中の鉄分の量を示す血色素量が少ないときは、栄養からきた鉄欠乏性貧血を考えなくてはならない。この際には、栄養に注意することは当然であるが、とりあえず鉄剤を服用することで、元氣、食欲といった一般状態が急激に改善されることが多い。

このように、成長期にあたる幼児から学童にかけては、この種の貧血が案外多い、食欲不振の原因となり結果となるという悪循環のみられることがあるので注意したい。

4 先天性心臓病

生まれつきの病気でありながら、幼稚園で初めて発見されるといったことの多いのが先天性心臓病である。先天性心臓病は出生一、〇〇〇人に対し七〜八人の発生率とされ、重いものは出産直後から一見して分かるものがふつうである。その主な症状は、血液中の酸素欠乏によって起こるチアノーゼ（唇や爪の色が紫をおびる）や呼吸障害で、生命の危険にさらされているのは当然である。

これに対し、軽いものは、特別な症状もないままに、見過ごされ、年齢がすすんで障害をあらわしたり、「かぜ」などの病気で思いがけず重症になり、初めて気づかれるといったこともある。外からみて、はっきりと分かりにくい病気であるだけに、園医とも協力、その発見につとめるべき異常といえよう。

先天性心臓病の種類は多いが、幼児期まで気づかれない場合、程度の軽い心室中隔欠損症、心房中隔欠損症、肺動脈狭窄症などが考えられる。このようなものでは、学童期を過ぎると種々の障害を起こす可能性があるので、幼児期から専門医の指導を受けておく必要がある。

身体検査で、心臓の雑音を指摘されたとき、胸部レントゲン検査で心臓の形に異常があると指摘されたときは、家族に精密検査を受けるよう積極的に勧めなくてはならない。また、心臓病の存在がはっきりした場合、これをこわがるのではなく、許される範囲で、なるべく一般園児と同じ保育ができるよう、専門医の指導を受ける心構えが大切である。

親の関心が低い病気

1 むし歯、歯ならび

むし歯や、歯ならびの異常は、健康、発育に大きな影響を持ちながら、親から病気としてはっきりした関心を持たれていない代表的な病気である。このことは最近の統計で、三歳児のむし歯保有率が、七八・五％で、その後の年齢ではさらに増えていることでも明らかである。

同じ栄養を摂取しても、これを利用する機能に障害があれば、その価値は着減する。この意味で、消化吸収の出発点にあたる口

腔、とくに歯の持つ意義はきわめて大きい。この意味で、歯の病気は、健康状態をある程度左右していると考え、家庭への連絡指導に力を注がなくてはならない。

まず幼児期のむし歯の特徴は、一本かかると急速にひろがることである。痛み始めると手がつけられなくなるので、早く発見、表在性のうちに治療を受けることが要訣である。さいわいに、歯は目に見える器官であるから、少なくとも毎月一度は家庭でも異常の有無を確かめるよう指導して、関心を高めなくてはならない。

つぎに、歯ならびの異常も重要である。従来、美容上からだけ問題にされてきた歯ならびであるが、今日では、栄養摂取の上でも、顎の正常な発育の上でも、大きな意義を持つことが明らかにされている。したがって、反対咬合、叢生（乱ぐい歯、やえ歯など）といった歯列の異常には幼児期から注意し、年齢に応じた矯正治療を受けなくてはならない。

特に幼児期の治療が必要なものとして、下歯列の前に出る反対咬合がある。この場合、二、三歳から永久歯の生えるまでに治療を終わらせることが望ましい。

また、乳歯のむし歯が放置された場合、永久歯の萌出に際し、歯ならび異常をきたす重要な原因の一つになることを心にとめるべきである。

2 皮膚の感染症

本人にあまり苦痛がないために放置されやすい皮膚の病気に伝染性軟属腫がある。幼児に多い、「いぼ」で、水いぼ、百いぼなどとも呼ばれているが、ウィルス伝染によって起こる病気であるだけに、ほっておくと、どんどん増え、他の子どもにも感染するおそれもある。小さいものは粟つぶ、大きいものは豆つぶぐらいで、表面がなめらかで、つるつるしているのが特徴である。かきむしると、中から白い粥状のものでて、これがくっつくときつぎどうつて行くので、皮膚科で、完全な治療をしてもらうよう指導する。

また夏にかけて多いとびひは、感染性が高いだけでなく、そのあと、急性腎炎などを併発する可能性もあるので、注意しなくてはならない。

3 体格、姿勢

病気という言葉は適当でないが、体格や、姿勢も幼児の健康に大きな影響を持ちながら、関心は薄いようである。

体格として、肥満児は最近注目されているが、必ずしも適切な指導が行なわれているとはいえない。特に、幼児期に入っただけにふとりだした場合、肥満が負担となり、運動嫌い→消費エネ

ルギーの減少→肥満、の悪循環が起こりがちである。この意味でも、肥満児に対しては、早期に食事指導、戸外運動の奨励などを行なわなくてはならない。

家庭での姿勢に対する関心は非常に低い。ただ、体内の各器官のバランスのとれた活動には、正しい姿勢が大きな力を持つとされている。また、正しい姿勢は子どもの心にもはりを与えるはずである。

幼児期後半になれば、姿勢の矯正を始めてよい年齢に入るので、家庭とも連絡して、脊柱の彎曲にも関心を持ってもらう必要がある。軽度の側彎でも、急速に成長する思春期に入ると、急速に進むとされているので、あまり姿勢の悪い子どもは整形外科医の診察をうけておく必要がある。

むすび

幼児期になおざりにされがちな異常や病気を、いくつかり上げてみた。

一つ一つは小さなものようでも、健康に思わぬ影響力を持つことを考えると、その発見を家庭だけにまかせず、保育者として注意してみたいと思う。

(大蔵病院・医師)